名古屋女子大学　紀要　57（家・自）55～66　2011

東欧ポーランドのアール・デコ様式のインテリアと家具

野崎　勉

Art Deco Style of Interior and Furniture at Home in Poland in Eastern–Europe

Tsutomu NOZAKI

要　旨

1925年のパリで開催された､｢装飾芸術・工業芸術国際博覧会（アール・デコ展）｣において、当時のポーランドのアール・デコ様式を代表する建築や室内装飾及び家具等を示したポーランド・パビリオンが建設された。

本論文は､ポーランド留学時の継続研究の一部であり､ポーランドの室内装飾や家具等のアール・デコ様式について、幾何学形態、材料、色彩などの特徴を述べる。（注：１）

アール・デコ初期にはウイーン分離派のゼツェッション様式などの影響を受け、更に古典主義、ビーダーマイヤー様式等を受け継ぎ、一方ではロシア構成主義やチェコのキュビスムの影響を強く受け、壁、床、織物等に幾何学的形態を示す室内様式と家具が出現した。

具体的には、直線、円弧、円、三角形、立方体、角錐、流線型、ジグザク線、ジッグラッド、階段状、原色、漆を使用し、フォークや大工技術の木彫りの幾何学的モチーフを持つアール・デコ様式について述べる。さらに、自然素材の木目使用や漆黒や合板の黒壇、曲木家具による曲線、円弧、曲面のアール・デコ様式家具の特徴を具体的に述べる。

Ⅰ．アール・デコの先駆者、ポーランド応用芸術協会の活動から

1901年に、ポーランド南部の都市、クラクフに民衆芸術、クラフトと産業との融合を目的とした当時の建築家、家具デザイナー、クラフトマンらによる協同組合が設立され、制作とデザイン活動の拠点となるクラクフ工房が結成された。

そこには、後の1925年のパリで開催された「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」展示で活躍する、アール・デコ様式の先駆者達の芸術家が参加した。

彼らは､それらのポーランド・パビリオンの設計者のユゼフ・チャイコフスキーや､カロル・ティヒ、ヴォイチェフ・ヤストジェンボフスキー、スタニスワフ・ビスピアンスキー、さらにポーランド・パビリオンの企画担当者のイエジー・バルフアウォスキー、ヤン・シチェプコフスキーなどであった。

彼らの活動目的は、１）．ポーランドの新しい民族・国家様式の創造をめざす。それは、その土地固有の民衆芸術、フォーク芸術、職人仕事や伝統からのインスピレーションを得て、建

*（名古屋女子大学家政学部生活環境学科、短期大学部専攻科・生活創造デザイン学科非常勤講師）

築、室内、家具に関する様式の確立をめざすものであった。

次に、2）．クラフト（職人仕事）の芸術水準を高め、産業への芸術の導入であった。つまり、クラフト・装飾芸術と産業の融合による作品を目指した。これは、アール・ヌ－ボー様式には見られなかった現象である。彼らは、イギリスのウイリアム・モリスのアーツ・アンド・クラフト運動やジョン・ラスキンらの手工業の芸術運動から影響を受け、大量生産による作品や製品の質低下を防ぎ、産業と融合する形の芸術運動を展開した。

その最も代表的作家の一人に、これらの芸術運動に参加したカロル・ティヒが指摘されている。（写真－１、参照）、（写真－２，参照）。

彼の作品は、オーストリアのウイーン分離派のゼツェッション様式作家、ヨゼフ・ホフマンのウイーン工房の作品から影響を受けた。（注：２）（写真－３、参照）

カロル・ティヒの作品は、1913年にクラクフの都市で開催された独立住宅の展示にその特徴を表した。　この独立住宅は、シンメトリー、装飾が控えめな古典主義のファサードが見られ、玄関の間と階段手すりに純粋な幾何学形態をとり、ウイーン郊外のアール・デコ様式の初期作品と近似する建物であると言える。

ヨゼフ・ホフマンのウイーン工房の家具との類似性は、首尾一貫して機能的な構造の支持が指摘され、特に1903年－1906年のヨゼフ・ホフマンの作品と類似し、幾何学形態の正方形、円、垂直・直角、控えめな装飾性、縁の形態、三角形・正方形モチーフ等は、シンメトリー、幾何学化、単純化への作品傾向を示すアール・デコ初期のウイーンの作品に近似している。それに加えて民衆芸術のインスピレーションから得た特徴やデザインの傾向を示す事が指摘される。（写真－１，写真－３，参照）

特に、古典主義やビーダーマイヤー様式（注：３）の楕円の線が特徴的であり、1912年のクラクフ庭園での「建築とインテリア」の展示で示されるサロンの家具が、固いインテリアの雰囲気を和らげている。（写真－３、参照）

この特徴は、いわゆる寝室の家具（写真－１，参照）で、水平線と垂直線の釣り合い法則で構成され、円形の形態に透かし彫りの装飾と、非常に単純で黒白の小さい三角形のはめ込み細工、象牙が見られる。一方、サロンの家具は、明らかにより少ない幾何学形態の特徴を示し、室内様式ではビーダーマイヤー様式の家具をはじめ、ポーランドのアール・デコ様式の前兆が認められる。

Ⅱ．アール・デコ様式の先駆者、Stanisław Wyspiański（スタニスワフ・ビイスピアンスキー）

アール・ヌーボーとして有名であった作家、スタニスワフ・ビイスピアンスキーは、インテリア、建築、プロダクトデザイナーとして1904年に「国家・民族のインテリアと家具」と題し、クラクフの芸術展示会に参加し展示した。それは、民衆装飾と調和したゴシック回帰と認識される集会所・娯楽室の家具であった。その特徴は、山岳芸術から引用されたものと言える。

彼の山岳フォーク芸術の関心は、1905年にタデウシ・ゾフィア・ジェロムスキー夫妻の住宅の食堂に見られる。食器棚の扉と椅子の背もたれに、様式化された星型のポーランド南部山岳地域のポドハレ地方の木彫り装飾が配されている。（写真－４、参照）

同様に、彼の前述の住宅のサロンには、民衆芸術のフォークの特徴が示されており、単純さ、幾何学的形態、装飾エレメントの控えめさ、材料の美学的な応用などの特徴が見られる。これらすべての家具のコンポジションにて、純粋に幾何学的であった。

全体に部屋のプロポーションとその美しさは印象に残る。（写真－４，参照）

次に、アール・デコ様式の先駆者としての兆候を示す作品は、1904年のクラクフの都市に建設された医者協会建物であり、その建物の会議ホール内部の肘掛椅子の幾何学的形態の椅子本体である。そのインテリアは、ウイーンのゼツェッション様式の初期作品と類似しており、ポーランドのアール・デコ様式の前兆となり、すなわち、ヨーロッパー幾何学―国家―民衆芸術等の図式化された特徴と一致するものである。

それと同時に、オーストリアのウイーンの初期アール・デコ様式の影響を示すものと指摘されている。

Ⅲ．1925年、パリの装飾芸術・工業芸術国際博覧会展示のポーランド・パビリオンのアール・デコ様式の特徴

Ⅲ－1]．建築とインテリア、室内装飾の特徴

ポーランドの展示は、パリのセーヌ川の北と南の両方に占める博覧会の三つの敷地に分散されて展示された。

まず、ポーランド・パビリオンが主な建物として、セーヌ川右岸の緑地帯に建てられた。この建物は建築とインテリにおいてユニークな様式特徴を持ち、キュビスムの幾何学形態と民衆フォーク芸術の融合されたアール・デコ様式を表現したものであった。

次に傷病兵と名付けられたパビリオンが建てられ、礼拝堂のインテリア、ダイニングルーム、さらに事務所等に、民衆芸術、フオークなどの職人技術が展示された。

最後に種類別に分けられた幅広いポーランド応用芸術が展示された部屋を有するグラン・パレスの建物が建てられた。

また、最後に傷病兵と称されるパビリオンの前にキオスクとさらに別の場所に舞台ステージが建てられた。

最初に、ポーランド・パビリオンのアール・デコ様式の特徴について論じる。

この建物は、フランスのアール・デコ様式のモチーフが浸透された事例として認識され、ポーランドの民族的特徴に加えて、ヨーロッパ芸術のアール・デコ様式に近似性が認められる。

特に、その土地固有の様式がクリスタル・結晶化の形態を有し、室内装飾、家具等に加えて、彫刻、モニュメンタルな絵画、金属造形、グラフィック等のポーランドのアール・デコの様式が認められる。つまり、そのインテリアの内部装備は、主要なポーランドの新しい装飾芸術の特徴を示している。

この建物は、ポーランド応用芸術協会の会員であるユゼフ・チャイコフスキーの設計である。（写真－５，参照）

建物のファサードはホールの長い壁に三つの細長い窓タイプがあり、パビリオンを分割している。その上に碑文が書いてあり、その上部には壁に沿って上がる類似した形態の構造のジグラッド型のチンパナムの階段が昇り、建物全体の上にガラスの塔―ランタンが添え、結晶体の形と階段状のジグラッド状のアール・デコ様式の特徴が指摘されると言える。（写真－５、上部のクリスタル化の形態を参照）

次にポーランド・パビリオンのインテリアと室内装飾について以下に論じる。

これらのインテリアは、ユゼフ・チャイコフスキー、ヴォイチェフ・ヤストジェンボフスキー、カロル・ストリイエンスキーとゾフィア・ストリイェンスカなどが設計したものである。

彼らのインテリア設計は、ポーランドのアール・デコの特徴的なフォーク芸術と伝統のインスピレーションを強調し、同時にそれらの作品形態の傾向は、ヨーロッパの装飾芸術の特徴を

目指し、さらにこれらのヨーロッパの方法と革新性に対して、ポーランドのオリジナル性を独自に目指したと言える。

パビリオン内部の出入り口は、額縁枠の正方形パネルで区分された巨大な木造扉があり、三角形の鋭い切り取りモチーフで充填されている。そこから、石の台座（柱頭）の中に幾何学化された鷲の結晶化形態で構成されている。そして、三角形と四角形の箱を有する三角形の出入り口のチンパナムが存在する。

パビリオンの最初の部屋は、玄関の間でホールの形態をなし、チェス盤構成の幾何学的形態をなす壁上部の絵画で覆われている。天井にはポーランドのアール・デコ様式の一つと言われる杉綾模様で配された帯モチーフが強調されている。（写真－６）

次の部屋は、ユゼフ・チャイコフスキーによる設計の部屋であり、八角形の平面プランで計画され、名誉サロンの名称が与えられている。二翼化された玄関の間から見られ、三角形が聳え、扉は杉綾模様の連続で構成されたガラスのパネルで合成されている。（写真－６、参照）

この内部のインテリアは、リズムのある彫刻された角錐形態を有する太鼓のサロンの丸天井屋根（外部に段状飛びの小尖塔―ランタンが覆う）は、黒オーク材を有する柱で支持され、その上には金属の花が聳える。それらの柱は窪みの規則正しい粗面積み仕上げのモールディングの装飾形態を持つ。（写真－６、参照）

何よりもこの名誉サロンの６つの絵画パネルの壁面装飾であり、ゾフィア・ストリイエンカの作品である。擬人化された民衆儀式と宗教儀式が四季で紹介されている。シンメトリー構成で絨毯が敷かれ絵画モチーフの幾何学的構成がなされポーランドのアール・デコ様式を表現している。

パビリオンの最後は、グラン・パレスの室内様式であり、陳列・展示用の大きな広間ホールであり、ガラス扉を有している。そのホールの天井は、結晶体ヴォールト板型で形成され、隅には多種多様な装飾壁で正方形の装飾で形成され、床は寄木張りの床である。このインテリアは､ユゼフ・チャイコフスキーとヴォイチェフ・ヤストジェンボフスキーによる設計であった。

２番目のポーランドの展示館として傷病兵パビリオンの室内様式が注目される。

このパビリオンのインテリアは、ヴォイチェフ・ヤストビェンボフスキーによって設計された。この建物内部ギャラリーであり、最も様々なポーランドのアール・デコの業績作品が展示されている。堂々とした代表的なホールは、三角形のマニエリズムの表現であり、ポーランドの変種の極端な幾何学的形態の傾向を表現しており、三角形モチーフが優位を占める。壁に鷲と窪みのレリーフが施され、階段状の段跳びフリーズの彫刻、八角形の鏡パネルと壁の窪みにベンチが設置してある。ホ－ルの幾何学的厳格さは、軽快な掛け布、厚手のカーテンで部屋の雰囲気を和らげた。

Ⅲ－２]．パビリオンにおける家具の特徴

Ⅲ－２－１)．ポーランド・パビリオンの名誉サロンの家具 Karol Stryieński（カロル・ストリイエンスキー）の作品

この名誉サロンの家具は､木造ベンチとテーブルであり､モニュメンタル性や厳格性を持ち、深い彫りの表現は、アール・デコ様式の先駆者で前述のスタニスワフ・ビイスピアンスキー作品のクラブ・娯楽室におけるベンチのエレメントと類似し、特に脚に見られる手編みレースの形態にキュビスムの特徴が指摘される。

同様に、ポーランド南部の山岳地帯のポドハレ地方の鋭いナイフで刻まれたモールディング

がアール・デコ様式の特徴をより示していると言える。（写真－７参照）

それは、いわゆるテーブルとベンチは、特徴的な支柱（脚と背板の柱）の彫刻性であり、キュビスムの鋭い木彫り、モールディング装飾をなし、ピラミッド形態をなしていた。（写真－７，参照）

Ⅲ－２－２）．ポーランド・パビリオンのホール執務室の家具 Jozef Czajkowski（ユゼフ・チャイコフスキー）の作品

パビリオンを代表するホール部分の執務室の家具は、ユゼフ・チャイコフスキーによって設計され、この室内様式と家具は、1818年から1848年にポーランドの邸宅に流行したビーダーマイヤー様式から引用された。（写真－８参照）

この様式のインスピレーションは、何よりも扉区分の幾何学的形態の円弧を有する図書棚の中に注目される。　図書棚の傍に立つ肘掛椅子やマッシブで大きな事務机は、様々の時代から装飾オーナメントが改造されたものであり、アール・デコ様式が、様々な様式の折衷主義である事を示していると言える。

また、繊細にデリケートに曲がった肘掛椅子のバロック様式の特徴がみられる。（写真－９，参照）

Ⅲ－２－３]．Wojciech Jastrzębowski（ヴォイチェフ・ヤストジェンボフスキー）作品

彼の作品となるサロン部分の室内はキュビスム性と素朴さが際立った。

唯一のそれぞれの装飾は、鋭い角の張り板・化粧板、つまり突板の縞をつけられた木目の装飾であった。もちろん、クラクフ工房の伝統からのフォーク芸術のインスピレーションが際立つ。この家具本体の建築・構造性は、前述のスタニスワフ・ビイスビアンスキー設計のゼロムスキー夫婦住宅の家具と関連すると言える。

サロンの一部は、民衆芸術の起源が指摘され、典型的な幾何学的形態を持つ家具を含む。すなわち、椅子―スツール（肘掛・背のない腰掛け）、箱型の長椅子、ソァー、不格好な、粗野で、深い肘掛椅子、頑強な構造を示すテーブル、コンソールテーブルと花台が挙げられる。（写真－10、写真－13参照）

シンメトリー形態、装飾のつつましさ、幾何学化された花型におけるカーペット材料の座面への家具の覆い、単純な形態のコンソール、動物型を象った陶器オーナメントの覆い、ソファにコブラン織りが掛けてある特徴が指摘される。

傷病兵パビリンの食堂サロンでは、食器棚、椅子、肘掛椅子、コンソール、テーブル、明るい色の木材で弓形に曲がったモールディングで作られたれた幾何学的形態を有する時計台があげられる。（写真－10，11，12，13、参照）

また、時計台の長斜形（編菱形）の構成で覆われたはめ込み細工は、フランスのキュビスムの影響を受けた建築家、ル・コルビュジェの家具の反響が見られる。（写真－11，参照）

また一方では、食堂セット全体は、フランスのアール・デコ作家で、装飾芸術・工業芸術国際博覧会のフランスパビリオン部門の設計者である、ユウレス・レレウ（Jules Leleu）の家具形態に近い優雅で単純な形態を取っている。（写真－14）

その食堂サロン室の壁は、蝋染め壁で青色―白色であり、ポーランドのカルパチア山脈の民衆芸術のシンメトリー花型連続の形態が示されている。（写真－13）

また、食堂の家具を木目のあるベニア板・化粧板で装飾し、鋭い角度で配された三角形の様

式のアール・デコ様式を取っている。半円形の形態が食器棚に見られ、化粧台の縁取り、さらに曲がり脚の猫脚の椅子。食器棚の上に置かれた小列柱を有する時計台、楕円形の鏡、脚を大きく広げるテーブルが指摘される。（写真－10，11，12，13，参照）

また、ヤストジェンボフスキーの家具作品について、フランスのアール・デコ作家のジャック・エミル・リュルマンの家具様式との近似性が指摘されている。

Ⅲ－２－４］．チェコのキュビスムの影響を受けたアール・デコの家具．Mieczysław Kotarbiński（ミェチスワフ・コタルビンスキー）の作品から

傷病兵パビリオンのポーランド部門に属する、いわゆる「男性の書斎」と命名された展示室を設計したのは、ミェチスワフ・コタルビンスキーである。彼もポーランド応用芸術会員であり、クラクフ工房の出身であった。　このセットは、小さいのと大きいテーブルと食器棚と補助品、スツール、暖炉等で構成される男性の書斎として機能している。（写真－15，参照）

興味のある事は、チェコの芸術家達のキュビスム家具の初期形態と非常に類似している点が指摘されている。

それは、1911年にチェコ人のヴラジスラフ・ホフマンによってヨゼフ・マラチカのために設計された家具セットが例として挙げられる。（写真－16，参照）

コタルビンスキーの家具作品は、鋭い不格好な粗野の形態を持つが、木目に和らいだオーナメントがあり、それらの暗い色彩（家具、扉枠、天井梁）の使い方は、キュビスムのインスピレーションの源を暗示している。そして、それに対してコントラス（対照）を表現したのは、幾何学的形態の明るい色の床と素朴なキュビスムの壁暖炉である。（写真－15，参照）

コタルビンスキーの家具は、民衆大工技術からインスピレーションを受け、キュビスムの本体の形態とその素朴さの特徴が挙げられる。

全体してインテリアは、シャンデリアとブロンズの燭台で構成され、密に植物―幾何学的オーナメントで覆われている。（写真－17，参照）

これらの家具には、逆ピラミッド型の溝を持つ座る脚の形態が見られる。両方の家具セットは、狭いマッシブな円錐上部が切り取られたモールディングされた三角形の縁支持脚が特徴づけられている。

この様に、彼の作品はチェコの初期キュビスムの影響を強く受け、いわゆる分析的キュビスム段階の影響を受けている。それは、鋭い溝形態のモールディングと深く切り取られた表面を形成している。コタルビンスキーが使用した家具材料は、松材であり、一方、ヴラデイスワフ・ホフマンが使用したのはオーク材の相違がある。

チェコのキュビム家具は最もオーク材が使用され、その中で松材の使用も見られる。原則として他の木材は使用されなかった。この近似性は類似した材料の使用によるものであり偶然であったかもしれないが、二つの国に現れている木材が好んで使用されたものと思われる。

コタルビンスキーは、パリに滞在し、そこでピカソのキュビスムやチェコのキュビスムに触れる機会があり、彼の作品のインスピレーションを開花させたものと推測される。

Ⅳ．アール・デコの開花、ポーランド国内展示会での作品

「ŁAD」（ワド）芸術協同組合会員によるキュビスムと構成主義の作品

Ⅳ－１］．Juliusz Pietrzyk（ユリウシ・ペトジック）の家具作品から

パリでの装飾芸術・工業芸術国際博覧会展示で活躍した芸術家達は、1926年に芸術家協同組

合を結成し、これまでのフランスを中心としたアール・デコ様式を継承し、ポーランド独自の民族様式をフォーク芸術に求めて新たな創造活動に取り組んだ。

1929年のポーランド国内展示会で、キュビスム形態の影響を受けたアール・デコ様式のポーランドの代表的作品を、ユリウシ・ペトジックが展示した。

彼の書斎、寝室、食堂の家具設計は、アール・デコ様式における主要なポーランドで実現された作品の一つと指摘されている。(写真－18，19，20，参照)

黒い色のカバーを有するマホガニの材料による食堂、さらに書斎を彼は設計した。

それらは、明白に幾何学的形態によって構成された室内装備である。

それには、20世紀に1920年代のキュビスムの家具のアイデアの引用が見られる。同様に、木目の強調された図の幾何学的形態の表面が注目され、事務机の脚は、階段状に分割された事務机脇の引き出しを有するフランスのブレアウ・プラット(Burau plat)と類似した形態を有する。全セットにおいて、装飾が円の刻み、「尖塔アーチ」つまり「とがりアーチ」等が見られる。

いずれにしても、このようなアール・デコ様式のキュビスムの強い表現が見られる事例は、チェコのキュビスムの家具以外に見当たらないと言える。

Ⅴ．幾何学的形態の家具の特徴

家具材料と曲木家具について

Ⅴ－１]．家具の材料について

アール・デコ様式の家具に最も使用されたのは木材であり、松材が60％、次に欧州トウヒ（12％)、オーク材（５％）と続き、幾何学形態の家具に応用された。

このオーク材は、最も価値のある材料であり、有名なベニヤ板、化粧板、突き板、単板や家具プレート等使用された。

樅の使用は稀であり、およそ３％であった。ハンノキは、ポーランドではマホガニであり、合板、ベニヤ板への材料に使用され、家具の幾何学形態と曲線に応用が可能となり、樅、松材そして欧州トウヒは、通常より安価な家具の生産に使用された。

ブナは､何よりもまず曲がった家具（曲木家具）に使用され､主にカルパチア山脈で得られ、最も優れている木材として認識され、密で真っ直ぐな木目が得やすく曲げやすかった。家具加工には、唯一、赤ブナが使用され、色彩は黄色がかった赤色から赤色―こげ茶が多くあった。曲木家具は、ブナの細枝の望ましい形態が選ばれ、熱い湯の熱処理で加工されて、多彩な曲線を生みだした。

また、美しい素材を生かした家具材料や装飾の観点から、家具加工へのふさわしい材料として、西洋なし、桃、桜、くるみ等が使用された。それらは、なによりもアール・デコ装飾の価値あるものとして使用されたと言える。

1930年代になると、エキゾチックな材料が注目され、黒壇、マホガニの使用に傾いて、より一層のアール・デコ様式を用いたと言える。

さらに突き板、化粧板、合板、ベニア板などの薄い板材の加工により、家具の天板などに使用され、曲木家具、曲面家具の加工をより容易に可能とした。

Ⅵ．日本の漆の使用と日本美術への関心

興味のある点として、アール・ヌーボー様式時代から、日本ブームの到来以来、フランスを中心として、アール・デコ様式の中で、日本の漆技術が家具塗装の中に使用された事が指摘さ

れる。

ポーランドにおいても、この漆によるアール・デコ様式の家具が作品として作られた。特に1930年代になって、食堂やサロンの収納棚に多用された点が特筆に値する。（写真－21、参照）

また、家具おける漆の使用だけでなく、アール・デコ様式のインテリアは装飾を控めにし、家具の多くを室内に配置しないコンパクトな室内を目指し、室の使用における柔軟性をもつ室内様式を選択している。これらは、日本の住宅をはじめとする室内に家具を置かず、必要に応じて家具を室内に入れる室礼の作法を応用したと言える。

Ⅶ. まとめと考察

1918年から1938年の20年間は、ポーランドにおいて第１次世界大戦が終わり、第二次世界大戦が始まる前の独立を獲得し､ヨーロッパのアヴァンギャルド芸術運動と歩調を合わせる形で、新しい芸術運動が開花した。それは、独立後の国家様式の模索と重なり、奇しくもフランスを中心とした当時のアール・デコ様式を国家の様式の一部と扱った歴史的背景がある。

このアール・デコ様式がアメリカやアジアにも流行した事実は広く世界に知られているが、チェコやハンガリー、ポーランドにも強く普及した事実が明らかになった。

当時のアール・デコ様式のキュビスムの影響を受けていたが、ここポーランドでは、一層強いキュビスムの影響を受けた幾何学形態の室内様式と家具の特徴が指摘された。

これ程までに強いキュビスムと一方では、自国の伝統と民衆芸術の調和を図ってアール・デコ様式を発展させた国は珍しい。

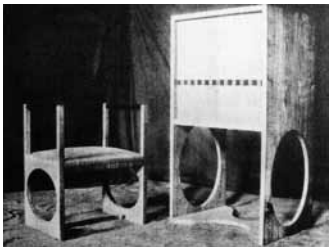
今回、幾何学的形態の家具を中心にヨーロッパや他の国との比較をも含めてその詳細について報告した。今後さらに、1930年代のフランスから伝わったロシア構成主義やその後の装飾を排除した機能主義への移行期の室内様式と家具の研究を行いたい。

Ⅷ. 注：

１．注－１：早稲田大学大学院理工学研究科修士課程建築学専攻修了後、文部省ユネスコ留学生課から留学し、国立ワルシャワ工科大学建築学部大学院博士課程及び同大学講師時代にて、1918年から1938年におけるポーランドの近代建築史とそれらの家具に関する研究の未発表研究の一部。

２．注－２：ポーランドのアール・デコ様式の先駆者の多くは、オーストリアのゼツェツション様式を代表するヨゼフ・ホフマンの工房で働き、彼の作品から多くを学んでポーランドに帰った。その後の工芸運動、アール・デコ様式の展開と続く。

３．注－３：ビーダーマイヤー様式は、1815年から1848年にドイツ、オーストリアで中産階級に好まれた室内様式であり、ポーランドでは1825年以降に地主や貴族の邸宅の室内様式と家具様式に普及した。


（写真－１）

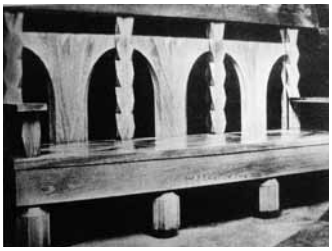
（写真－２）

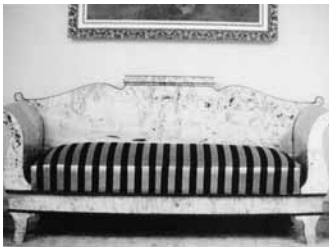
（写真－３）

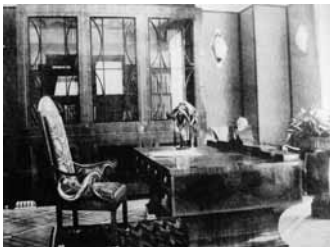
（写真－４）

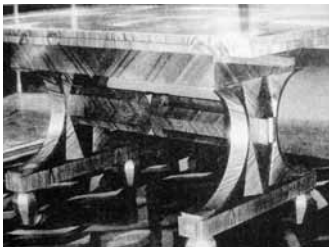
（写真－５）

（写真－６）


（写真－７）


（写真－８）

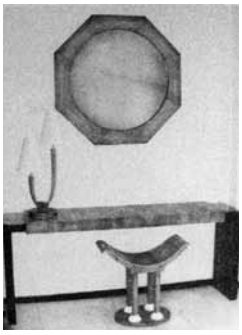

（写真－９）


（写真－10）

（写真－11）

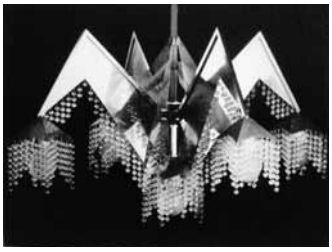
（写真－12）

（写真－13）

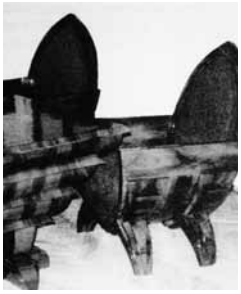

（写真－14）

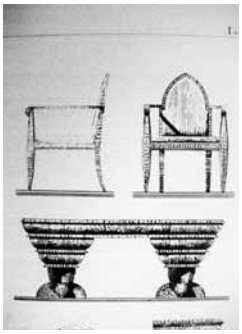
（写真－15）

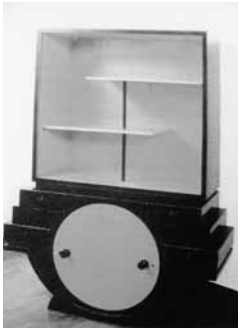
（写真－16）


（写真－17）

（写真－18）


（写真－19）


（写真－20）


（写真－21）

参考文献・写真資料の引用文献

１）Art Deco w Europie i w Polsce. Anna Sieradzka.著　Volumen. 出版. 1996年. １頁－175頁.（写真－５は115頁から引用）

２）ART DECO przedwodnik dla kolekcjonerów.Joanna Hubner－Wojciechowska.著　Wydawnictwo Arkady. 出版.　Warszawa 2008.1頁－223頁（写真－１、写真－２は、61頁から。写真－３は19頁から。写真－６は63ページから。写真－14は17頁引用。写真－19と写真－20は、67頁から引用。写真－21は、122ページから引用）

３）Biedermeier Przewodnik Dla Kolekcjonerów. Joanna Woch.著　Wydawnictwo Arkady. 出版. Warszawa. 2007.1頁－291頁（写真－８は、172頁から引用）

４）Polskie Meble 1918－1939. Forma－Funkcja－Technika. Anna Kostrzyńska－Miłosz.著　Instytut Sztuki Polski Akademii Nauk. 出版. Warszawa.2005. １頁－328頁（写真－７は37頁。写真－10、写真－11は39頁。写真－12は、40頁から引用。写真－13は、38頁から引用。写真－15は、41頁から。写真－18は、69頁引用）

５）Dzieje Sztuki Polskiej. Franciszek Stolot. その他著. Kluszczyński Wydawnictwo. 出版. Warszawa.1999. １頁－680頁（写真－４は、642頁から引用）

６）ART DECO. The Europian Style. Sarah Morgan.著 Arlington Press. 出版1990. 30頁

７）National Style and Nation－State. Gillian Naylor.著 Manchester University press.出版 1992. １頁－150頁（写真－９は、71頁から引用）

８）Szlakiem architektury art deco. Stalowa Wola. By the Route of Art Deco Architecture.Stalowa Wola. Anna Sieradzka.Muzeum Regionalne w Stalowej Woli.出版. Stalowa Wola .2008. １頁－71頁.

９）Meble projektu Mieczysława Kotarbińskiego na Wystawe Paryska 1925.　－Zródła Inspiracji. Anna Kostrzyńska－Miłosz.Warszawa. Instytut Sztuki PAN. Biuletyn Historii Sztuki.R.LVIII.1996, nr, 1－2.

10）Art Deco.Towards the Definition and Chronology of the Style. Andzej･K.Olszewski. Polish Art Studies,1992,t XIV. P.73－p.90.

11）Praha. České uměni 1890－1930. Od Secese po Art Deco. Czech Art 1890－1930:From Art Nouveau to Art Deco.
煌めくプラハ. 19世紀からアール・デコへ. 世田谷美術館／読売新聞. 1999

12）ART DECO,アール・デコ. アラステア・ダカン　著. 関根秀一、小林紀子、新発田洋一訳. 洋版出版株式会社、平成５年

13）チェコのキュビズム建築とデザイン1911－1925, ホホル、ゴチャール、ヤナーク. 鈴木豊、藤森照信、ロスチスラフ・シュヴァーハ、ペトル・ヴォルフ　著　INAX出版. 2009.（写真－16は、69頁、写真－17は、67頁から引用）

14）国際構成主義. 谷本尚子　著　世界思想社　2007年.

15）ポーランドの建築・デザイン史. 工芸復興からモダニズムへ. ディヴィット・クラウリー　著. 管靖子. その他訳. 2006年.

１.（写真－１）カロル・ティヒ作の寝室の家具、椅子と収納棚. ウイーン工房とフォーク芸術の影響. 1908年

２.（写真－２）カロル・ティヒ作の邸宅住宅のサロン. ビーダーマイヤー様式の影響を受けたアールデコ様式. 1912年

３.（写真－３）ヨゼフ・ホフマン作の調整背もたれをもつ肘掛椅子. 1905年. ウイーン工房で制作.

４.（写真－４）スタニスワフ・ビイスピアンスキー作. タデウシ・ゼェロムスキー住宅のサロンの食堂. 1905年

５.（写真－５）ユゼフ・チャイコフスキー作.「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」パリ. ポーランド館. 1925年

６.（写真－６）ユゼフ・チャイコフスキー作. ポーラント館の玄関の間、ホール. チェス盤構成の幾何学的形態の壁上部. 1925年

７.（写真－７）カロル・ストリイエンスキー作. ポーランド館の名誉サロンの木造ベンチ. フォーク芸術の影響を受けたキュビスム形態の特徴を示す。1925年

８.（写真－８）ポーランドの邸宅のビーダーマイヤー様式のソファ. ヨゼフ・ダンハウゼル作. 1830年

９.（写真－９）ユゼフ・チャイコフスキー作. ポーランド館のホール部分の執務室のバロック様式の影響を受けた肘掛椅子. 1925年

10.（写真－10）ヴオイチェフ・ヤストジェンボフスキー作.「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」傷病兵パビリ

オンのポーランドの食堂サロン．テーブル．木目と幾何学的形態．1925年

11. （写真－11）ヴオィチェフ・ヤストジェンボフスキー作.「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」傷病兵パビリオンのポーランドの食堂サロンの時計台．弓形に曲がった木彫りの幾何学的形態．1925年
12. （写真－12）ヴォイチェフ・ヤストジェンボフスキー作．傷病兵パビリオンの食堂サロンの食器棚．半円形の形態と鋭い角の三角形使用のフランスのアール・デコ様式．1925年
13. （写真－13）ヴォイチェフ・ヤストジェンボフスキー作.「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」傷病兵パビリオンの食堂サロン室．壁装飾は、ポーランドにおけるフォーク芸術のシンメトリー花型の形態と楕円形の鏡などのアール・デコ様式．1925年
14. （写真－14）ユウレス・レレフ（Jules Leleu）作．フランスのアール・デコ様式作家．化粧台とコンソール
15. （写真－15）ミェチスワフ・コタルビンスキー作．ポーランドの傷病兵パビリオンの男性の書斎室．1925年．チェコのキュビスム作家の強い影響を受けている。
16. （写真－16）チェコのヴラジミール・ホフマンの作．サイドボード．キュビスムの家具でオーク材を黒く塗装し斜めの面やボリューム感を出している。1913年
17. （写真－17）ミェチスワフ・コタルビンスキー作．植物の幾何学的形態のシャンデリア．1929年
18. （写真－18）ユリウシ・ペトジック作．ポーランド国内展示会の書斎の事務机．1920年代のチェコのキュビスムの影響．木目と逆ジグザッド状の引き出し事務机．1929年
19. （写真－19）ユリウシ・ベトジック作．ポーランド国内展示会の書斎．楕円形と尖塔アーチの背もたれを持つ肘掛椅子と事務机。それぞれの脚がアール・デコの曲線を強調．1929年
20. （写真－20）ユリウシ・ペトジック作．ポーランド国内展示会の書斎．肘掛椅子と事務机の家具三面図．正面図と側面図．1929年
21. （写真－21）作者不明．食堂用の収納棚．半円形と円形、正方形、長方形の幾何学形態と漆塗りと日本の引き違い棚．1930年代